巻頭インタビュー

今考えたい、国際協力と国際情勢（上）

佐藤都喜子
名古屋外国語大学副学長

医療地理学との出会いとJICAへの入構

――先生のご専門についてお聞きします。

佐藤　医療と社会科学との接点、あるいは社会と医療との仲介領域に興味を持っており、医療地理学（健康地理学）が専門です。かつて学部留学したミネソタ大学で学部の地理学の講義をいくつか取り、とにかく授業が面白く、強烈に関心を持ちました。

しかし、それと同時に、当時、既に帰国していた仲良しのメキシコ人の友人宅にホームステイしたり、アフリカからの留学生たちの話を聞いたりしていたので、「社会に貢献」するような方向に進みたいと思い、医療と地理学を掛け合わせた「医療地理学」という学問を専攻しました。

このような分野の研究者を探していましたら、籾山政子先生（故人・元女子栄養大学教授）という研究者に出会ってそこの助手になりました。ただ、包括的で、きちんとした体系的な学びをするには大学院に行く必要があり、同じ分野の学者がいるハワイ大学に留学し、その同じ敷地内にあるイ

（さとう・ときこ）米国ハワイ州にある米国立東西センター人口研究所奨学生として、ハワイ州立大学大学院博士課程修了。博士（Ph.D.）。国際協力機構（JICA）の国際協力専門員としてケニアに４年半、ヨルダンに12年間近く滞在した経験を含め、20年以上にわたる途上国支援の経験を経て、現在、名古屋外国語大学副学長・現代国際学部国際教養学科長（兼任）。（公財）味の素ファンデーション「『食と栄養』国際支援プログラム」の「食と栄養支援委員会」委員長。著書に『現代ヨルダン・レポート』（名古屋外国語大学出版会）他。

ースト・ウエスト・センターの人口研究所の奨学生になりました。その研究所では人口学も学びました。人口学を専攻したのは、奨学生のオブリゲーション（義務）として、人口学の必修科目を履修した上で、人口学修得の力を示す試験に合格しなければならなかったからです。ただし、後々、人口学は私の身を助けることになりました。

――そもそも国際協力や国際関係に興味を持たれたのはなぜですか。

佐藤　私はミッション系の中高一貫校に通っていたので、人々のために何か貢献している方の話を聞くことが多く、その中でも特に医師として長年ネパールで医療活動を行われていた岩村昇先生（故人・医師）の話に感銘を受けました。岩村先生は記憶では2回母校にお見えになりお話をされ、強烈に心に残っています。岩村先生をはじめ、いろんな方々の話を聞くことで、「社会に貢献する」という気持ちに目覚めると同時に、「日本を飛び出して仕事をしたい！」という思いが膨らんで、大学は国際関係学を学べる津田塾大学に進学しました。

進学した最初の年に、オランダで開催されるロータリークラブの若者会議みたいな夏季イベントに参加するチャンスがめぐってきました。でも、手違いで参加できなかったんです。それがとても残念だったので、じゃあ、いっそのこと在学中に留学しようと思い、父の知り合いがいるミネソタ大学に留学しました。19歳の時です。

家族、それに親友が羽田空港まで見送りをしてくれたんですが、両親がタラップを上る私に一生懸命手を振っているのに、私は一度も振り向かなかったと後で親友が教えてくれました。その時の私は、未来へのタラップを上っていたので、別れを惜しむ気持ちは全く浮かばなかったのだと思います。このことからも分かるように、留学中は、私の中に貪欲な気持ちがあったので、いろんな経験ができました。大勢のアメリカ人と友達になって家に招待されるだけでなく、海外からの留学生、特にアフリカなどの途上国からの留学生の友達と仲良くなり、アフリカに強く興味を持ちました。留学を終えたときには、アフリカについて何かやりたいなと思うようになりました。

――国際協力機構（ＪＩＣＡ）に入構された動機は？

佐藤　前出の籾山先生が亡くなられて、日本では当時、海外でのPh.D.（博士号）はあまり認められない時代だったので、自立しなくてはと思っていました。そこに、ＪＩＣＡに国際協力専門員という専門制度があることを、たまたま電車内の広告で知りました。ＪＩＣＡの試験に合格したので、大学の助手になる話をお断りして、ＪＩＣＡの方を選びました。今から考えれば、そこが私のターニングポイントでした。自立しなくてはと思った時に、私の原点は何だったのかと考えたんです。その時に、「社会に貢献したい」って思っていたよねと語りかける自分がいたんです。その原点であり、初心というのは、やはり中学高校時代にいろんな先生方の話を聞いたりとか、岩村医師の話を聞いたりとかしたことでした。

ケニアでのプロジェクト

――ＪＩＣＡではどのような仕事をされた